

非道と淫虐の上意

陰謀の贄にされた父と淫欲の贄にされた母子

佐太郎編 陰間寺出世菊



背景 : Photo by (c)Tomo.Yun (<http://www.yunphoto.net>)

濠門長恭

目次

一、母子連座	三
二、股間得度	一四
三、肛姦精通	七二
四、甚振人氣	一一二
五、陰間媾合	一七〇
六、家老惻淫	一九三
七、劍術折檻	二〇五
八、寺侍見習	二二七
九、姉上美慘	二五五
後書	二七七

一、母子連座

御蔵番頭ばんがしらの小早川忠茂が行方知れずとなつた二日後には、八百兩を超す公金が消え失せていることが發覺した。即刻、小早川家は閉門に処され、妻の民江以下、嗣子佐太郎、長女綾乃、次女琴乃も蟄居を命じられた。

その日のうちに通い中間は消え失せ、住み込みの下女二人も巻き添えを恐れて口入屋へ逃げ帰り、屋敷には一家四人のほかは先代から仕えている年老いた用人ひとりだけとなった。武家長屋住まいの二人の郎党は寄りつきもしない。

翌日には、大目付が配下の手勢を引き連れて屋敷に乗り込み、秋霜烈日の断が下された。

上意

御蔵番頭小早川忠茂儀 八百余兩の公金を拵
帯せしばかりか長年にわたつて二千四百九十

三両を着服せし不届きの段によつて土籍を削り而して死罪を申し付くる物也

直ちに討手を掛けて櫓擡の及ぶ限り追い詰め屹度討ち果たすべし

家族は之に連座して名を非人別改帳に移し以下の如く処する物也

一、民江儀

吟味の為入牢を申し付くる

一、嫡子佐太郎儀

精徳寺へ永代預かりとする

一、長女綾乃儀

処断は猶予し小早川追捕一行への同行を申し付くる

一、次女琴乃儀

奴やつしとして舞華楼亭主に下げ渡すものとする

因つて件の如し

死一等を免除されたのだから一見寛大な処置のようであるが、武家の妻子として死罪に処されるのではなく、非人に墜とされるので

は、死罪よりもなお苛烈だった。

「それがしからも申し渡ししておく」

平伏している四人の頭越しに、大目付が厳しい声を投げつけた。

「もし一人たりとて命に服さず逃亡を試みれば、一家そろって市中引き回しのうえ磔に掛けるから、左様心得おけ」

連座で罪を受けている者が重ねて罪を犯せば、やはり連座で家族も処罰される。しかも、非人別改帳に名を移されたからには、より重い刑罰となる。そんなわかりきったことを、なぜ念押しするのだろうか、佐太郎は訝った。あるいは、そこまで思い至らぬかもしれない琴乃への言葉だったろうか。

二人の下役人が、平伏を続けている四人の後ろへまわった。

佐太郎は肩をつかんで上体を引き起こされ、羽織を脱がされた。両手を後ろへねじ上げられて、手首を縛られる。肘を張った二の腕にも縄が掛けられて手首を吊り上げられ、最後

に腰縄を打たれる。

佐太郎は抗うことなく、縄目に甘んじていた。公金の着服とあれば、一家揃って死罪もあり得た。それが、三人ともに生命を赦されたのだから、何の不服があろう。

もつとも。死よりもなおつらい恥辱というものはある。琴乃はわずか十三歳（※）で廓に囚われて、夜毎に肌を穢される。

佐太郎を縛り終えた下役人が琴乃の肩に手を掛けた。

「やめて……縛らないで」

小さな声だが、悲鳴だった。

「御上のなさることです。おとなしくしていなさい」

母にたしなめられて、琴乃が首を垂れた。

その民江は、佐太郎よりもずっと嚴重で複雑な縛られ方をされている。

首にも縄を掛けられ、二の腕と腰縄を別の縄で結ばれて、身体の正面に大きな菱形が描かれる。縄が胸を左右から圧迫して、着物の

上からでも、乳房の膨らみが強調されているのが見て取れる。

琴乃の縄は、ずっと緩やかだった。腕を剥き出しにされ、前で手首を合わせて縛られた。縄尻で首を巻かれて、腕を斜め前へ突き出した形にされた。腰にも、別の縄が巻かれた。

綾乃を除く三人が立たされた。母、兄、妹の順で引き出された。綾乃だけが、縄も打たれず座敷に残されている。

廊下で四人の武士とすれ違った。三人は浪人らしい崩れた身形みなりだが、四人とも旅支度をしている。

あの四人が討手なのだろうか。佐太郎は引かれながら、上意の文言を思い出している。

「処断は猶予し小早川追捕一行への同行を申し付ける」

父を追う者たちに姉が同行させられるとは、どういうことなのだろうか。皆目見当がつかなかった。父の逃げた先を知らぬ姉に、まさか道案内をさせられるはずもない。

履物も許されぬまま、三人は脇口から外へ引き出された。

三人は、竹矢来を組んだ表門の前に、晒し者のごとく立ち並ばされた。

不意に、母が二人の子に顔を向けた。

「これが生き別れになるかもしれません。武家の娘であるとか、三百五十石の家格とかいっただことは忘れて、先様にどのような仕打ちをされようとも耐えなさい。生きておればこそ、浮かぶ瀬もあるというものです」

佐太郎は元より覚悟の前だったが。母の言葉は妹に向けられたものだろう。

琴乃の顔が泣き崩れかけた。この先の運命が、漠然と考えていたものよりよほど厳しいのだと、ようやく悟ったのだ。しかし、さすがに武家の娘。涙だけは見せなかった。

通りすがった顔見知りの下女が、驚いた顔で立ちすくんで、そのまま動かなくなった。

向かいの竹田家から中間が二人と下女が一人、何事ならんと顔を出して、三人の緊縛姿をい

つまでも眺め比べている。

佐太郎は空を睨むことで、突き刺さるような視線をかわした。うつむきたくはなかった。父のしでかしたことは、紛れもない悪事ではあるが、私利私欲のためだけではなかったはずだ。家族が、父を夫を信じられなくては、家が成り立たない。

野次馬が次第に増えてくる。どこそこの誰それと名前どころか、少なからず言葉を交わしてきた者の顔も交じっている。

不意に。うおおおおおおおと……と、野次馬がどよめいた。佐太郎が振り返ると、竹矢来で鎖された表門にへばりつくように、姉が立っていた。

腰巻一枚の裸に剥かれて、誰よりも厳しく肌を縛られている。二の腕がひしゃげるほどきつく縄を掛けられ、胸の上下を平行に縛られて、乳房が押し出されている。その谷間と腋の下を別の縄で引き絞られて、乳房が鞠のようにくびれていた。

「ひどい……姉様、おかわいそう」

妹が、ワッと泣き崩れた。

「なにゆえ、このようなむごい仕打ちをなさるのです」

大目付に言葉烈しく詰め寄った母が、下役人に腰縄で引き戻された。

「それはな、こういうわけだ」

廊下ですれ違った侍のひとり、高札を地面に突き立てて、板面を野次馬に向けた。佐太郎たちにも読める。

此娘儀 父親公金拐帯に付見せしめに引き回す物也

小早川忠茂 身の丈五尺六寸 瘦身 四十歳
稍若く見える

右眼横に小粒黒子右手甲に火傷痕有り
在所を報せし者に金拾両を与える物也

「姉で父をおびき出そうとは——卑劣な！」
高札を手にしている長身瘦躯の男に向かつて、佐太郎が激した声をあげた。

佐太郎の怒りを気にかけるふうもなく、四人のうちではただひとりきちんとした身なりの若い男が、大目付に呼びかける。

「一同打ち揃いましたからには、早速にそれぞれの場へ曳くべきと存じます」

「うむ」

高札が姉の背中に突き通された。首縄を通してから、手首と背中の中に根元がねじ込まれて、新たな縄で腹までくびられる。

「くうう……」

縄目の裸身を衆目に晒す恥辱もさることながら、このように胸も腹も圧迫されては、息が出来ないのではないか。佐太郎は、そちらを氣遣った。

ピシリと、縄尻で後ろから腰巻を叩かれて。羞恥と憤怒に全身を赤く染めて、姉が歩き始めた。大目付配下ではないらしい四人の武士が、姉を囲む。母と妹も、下役人に縄尻を引かれて、その後続いた。

佐太郎だけは、下役人ではなく大目付配下

の者に縄尻を取られて、真反対の方角へ引つ立てられた。

野次馬は皆、三人というよりは姉の裸身に吸い寄せられて、佐太郎など誰も見ていない。それでも、武家町を通り抜けた頃には十人ほどがついて来ていた。

大目付は武家町の背後に迫った小高い山へと足を向けた。

精徳寺へ預けられるのだ——と、佐太郎は知った。禅宗の流れを汲むこの寺の檀家には武門が多い。

※数え歳

生まれたときを一歳として、年が改まるごとに増やしていきます。大晦日に生まれた子は、生後二日目で二歳になるのです。

一休和尚の「門松は地獄の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」という狂歌は、このあたりの事情を理解してい

ないと実感が湧かないでしょう。
ちなみに、佐太郎は如月（旧暦二月）生まれ、琴乃は神無月（旧暦十一月）生まれです。物語の現時点は弥生（旧暦三月）。それぞれ満何歳何か月かは、読者各位で計算してください。

二・股間得度

四半時も歩かされると、すこし山道が広
つてきて、樹々を押し分けるようにして大門
が目の前に聳え立つ。

三人の僧形が門の前に並んでいた。六十過
ぎに見える容貌の僧が、紫色の^{だいえ}大衣と刺繡を
ちりばめた袈裟とで、ひと目で院主と知れる。
黄色の大衣に^じ太り肉を窮屈そうに押し込んだ
中年の僧は、それなりの身分。墨染の衣に無
地の袈裟をまとった修業僧は、三十を出るか
出ないかだろう。

三人の前で大目付と部下が立ち止まった。

「大目付の赤松左馬之助でござる。当家の罪
人、小早川佐太郎をお預かり願いたい」

佐太郎が前へ押し出された。

「お役目ご苦勞に存ずる。たしかに、お預か
り致す」

院主の答えを受けて、修行僧が佐太郎の縄

尻を役人から受け取った。

「では、御頼み申す」

佐太郎は大門の中へ追い込まれ、大目付一同は門外から見送る。寺院は公儀の直轄だから、身分を帯びて寺領に足を踏み入れることはできない。檀家のひとり、あるいは参詣客ないし信者としてなら構わぬが、大目付としてはキチンとけじめをつけたわけだ。

だんだん幅が広くなっていく一本道の行き着く先、中門をくぐると塀で囲まれた広い敷地が広がり、玉砂利が敷き詰められている。左右に小さな五重塔と金堂が並び、その奥にひときわ大きな法堂が控えている。

その法堂に上がる階きざはしの手前で、佐太郎は縄を解かれた。ジンジン痺れる手首を揉むような見苦しい真似はせず、緩く垂らした両手を前で組んで、佐太郎は指図を待つ。

「こちらにおわす御方が院主様じゃ」

黄衣の僧が老僧を手の甲で指した。

「我は別当、雲水の名は額朴という」

院主も別当も寺に一人ずつだから、法名で呼ぶ必要はなく敬称を使えと、暗に教えている。

その別当が大声で呼ばわると、裏手から七、八人の若い男女が姿を現わした。

「この者どもが、汝の先輩だ。良く見知っておけ」

佐太郎は戸惑った。寺に預けられるとは、嗣子を僧籍に入れて小早川家を断絶させる為と思っていたのだが。寺の小僧らしい姿をした者はひとりもない。小早川家の檀那寺とは、ずいぶんに様子が違う。

「小姓の若雲と若冬じゃ」

振袖を着て袴を穿き、腰に脇差を帯びた二人が、佐太郎に向かつてうなづく。ひとりは二十歳にちかく見えるが、佐太郎と同じ半元服の髪だった。前髪を後ろで結って後頭部にも髪を膨らませた若衆鬻にしている。もうひとりも同じ姿で、こちらは佐太郎と同一歳くらいか。

「腰元的美雪と美晴じゃ」

二人の娘が、目を伏せたのかうなずいたのか。

腰元とは耳にしたことのない言葉だったが、それよりは——この二人は男ではないのかと、佐太郎は疑った。

佐太郎の先輩というのであれば、この寺に属しているのだろうか、寺は女人禁制のはずだ。そういう目であらためて子細に見ると、娘にしては頬が硬く肩もいかつい。前髪から頭頂部をきらびやかな布で覆っているが、あれは月代を隠しているのではなからうか。

「見習の竹、駒、弓、鶴、里」

竹と駒は佐太郎と同じくらいだが、まだ総髪で茶筌髷にしている。あとの三人は、ずっと幼い。里などは、『つばなれ』しているかどうか。

そして、小姓や腰元とは異なる趣の異装だった。袖の無い法被のような短い胴着だけで、六尺褌が丸出しになっている。

「他にも雲水と小僧が八人ばかりおるし、寺男や寺侍もおる。これらは、おいおいに名を覚えてゆくがよい。人別から外れた汝は、その誰よりも下になるといふことだけは忘れるなよ」

少年たちの間に軽いざわめきが広がって、すぐに消えた。

「汝は下見習として働かせる。文句は無かるうな」

歳下の者の下位に置かれるのは不本意だが、この寺では先輩に当たる。それ以上に。佐太郎は罪人であり人別外の者なのだ。

「ございません」

言葉に不満を表わさぬように気をつけて、佐太郎は答えた。

「うむ。なれば、名を決めねばならぬな。露がよかろう。行儀作法は元より、それなりに素養もあるう。汝とて、信者の評判が良ければ、出世が叶わぬでもない。美露、若露、どちらにも良い響きじゃ」

名前を変えられることに否やはない。元服すれば改名するし、主家から名を賜ることもある。出家すれば法名を授かるし、娼妓は源氏名、芸人は芸名を名乗る。

「では、得度を授ける。法堂へ上がれ」

三人の僧が向きを変えて、背後の大きな建物へ向かつて歩き出す。

佐太郎はそれについて行きながら、またしても疑念を持った。佐太郎の先輩となる九人は、誰ひとりとして剃髪していない。なぜ、我だけがと思った。

法堂は本尊を祀つてある金堂の数倍も広い。ここに信徒を集めて法話をするのだから仕切の無い大広間になっている——はずなのだが、佐太郎が思っていたよりもずっと狭かった。といつても、奥の檀を除いても三十余畳はあるだろう。外はすぐ回廊になっているのではなく、両側にはいくつもの小部屋が設けられている。

須弥壇を背に三人の僧が並び、佐太郎はそ

の前に立たされた。九人の少年が三方を囲んだ。

「では、俗世の垢を落とすために、まずは素裸になれ」

何をどうされるか、ひと言の指図も聞き漏らすまいとしていた佐太郎だったが、それでも聞き違えたかと思つた。

「着物を脱ぐのですか？」

「小袖も袴も襦袢も褌も、すべて取り去るのじゃ」

まさかの応えが返つてきた。

なぜ、とは重ねて尋ねなかつた。罪人の身で、アレコレ逆らうのは烏澁がましい。

まして、この場に女人はいない（と、すでに佐太郎は断定している）。なんの恥ずべきことやある——と、おのれを勇気づけて。

そうなる。侍としての躰け、剣術で身に着けた果斷。佐太郎は、スルスルと衣服を脱いだ。越中褌（※）の紐をほどくときに、わずかに指が強張つただけだった。

脱いだ衣服を畳む手間は、掛けようにも掛けられなかった。脱ぐ片端から、九人が交互に佐太郎の手から取り上げていった。

修行僧の額朴が佐太郎の横に筵を延べた。

「そこに仰臥せよ」

十二人に囲まれて、佐太郎は別当の言葉に従う。どうしたものかと迷ったが、今さらに隠すのも女々しいと思い、両手は脇に置いた。半年ばかり前から黒く太くなって次第に縮れてきた萌え草が羞ずかしい。

別当と額朴が佐太郎の両側に座すと、見習の二人が、水の入った小盥をそれぞれの脇に置いた。

「では、得度を授ける。心を平らかにして、うろたえ騒ぐでないぞ」

これまで院主は、大目付への受け答えのほかは一切を別当に仕切らせて、静観というよりは傍観に徹している。僧籍に入ろうとする者に仏道の戒律を授ける場においても、みずから取り仕切ろうとはしない。

別当の手がツイと佐太郎の下半身に滑って。

「あつ……」

佐太郎が戸惑いの声を漏らした。男根を握られたのだ。

「まだ皮を被っておるが、どうかな？」

ツルリと剥かれた。痛みはなかった。

「ほう、綺麗なものじゃな。これ、手すさびをしておるのか？」

「お尋ねの意味がわかりません」

雁首のまわりをなぞられて、佐太郎の腰がピクツと跳ねた。

「皮被り者はとかく、ここに腐った豆腐のよ
うな垢を溜めておる。それが旨いという痴れ
者もおらぬでもないが」

後半の呟きは、佐太郎の耳に達さなかった。

「武士たる者、いつ屍を晒しても見苦しく無
きようと、劍の師匠から教わりました。そ
こに限らず、朝晩に身体を清めております」

「ふむ。良き心掛けじゃ。これからもそのよ
うに努めれば、信者にも好かれようぞ」

言いながら、別当は男根を蹴り続けている。茎を扱いたり鈴口をくすぐったり、皮を摘まんで被せたり剥いたり。

淫らかな心は無くとも、どうしようもなく怒張する。

「もしや、精通はあったのか？」

その話では、道場の兄弟子たちからかわれたのを忘れていない。

「……まだです」

未熟を羞じて小さな声だった。

「いや、重畳重畳。然るべき時が至るまで、構えて精を漏らすでないぞ」

別当の手がようやくやくに男根から離れて。たつぷりと手を水で濡らして、掌でささやかな淫毛を湿した。

股間に冷たく硬い感触があつて、天井を見上げていた佐太郎が、頭を起こしてそこを見た。剃刀が当てられていた。

「動くでない」

修行僧が、佐太郎の肩を押さえつけた。

「なぜ、このようなことをなさるのでですか？」
如何なる仕置にも甘んじる覚悟とはいえ、
股間の毛を剃られるなど覚悟の外だった。

「仏道に入る者は頭を丸める。汝は衆道に入るのじゃから、こちらを丸めるのじゃ」

「それは、どういう……」

「アレコレ尋ねずとも、じきにわかる。ここにおる陰間どもも、この得度を授けられておる。元は侍の子が、これしきのことだろうたえては見苦しいぞよ」

矜持を逆手に取られて、佐太郎は言葉も身動きも封じ込まれた。弄ばれた余韻でまだ半勃ちになっていた男根も、すっかり委縮してしまう。

シヨリツ……乾いた音が肌を伝って耳に届いた。

剃刀は入念に佐太郎の股間を撫でてゆき、男根の周囲だけでなく、玉袋を持ち上げてその裏側まで、産毛すら見逃さなかった。

別当が佐太郎の腕を持ち上げて、腋の下も

検分する。

「こちらは、脛と同じく幼いままか。いや、重畳重畳」

なにが重畳なのか、佐太郎にはサツパリわからない。

剃毛が終わって。立ち上がらされた佐太郎の背後から、額朴がおおいかぶさった。

「汝は、水揚げまで前袋で封じておく」

手で隠せるくらいの小さな三角形の金網を股間にあてがわれた。針金が細いので、男根と玉袋をひとつにまとめて握られると、金網が変形して股間を包み込んだ。金網につなされた鎖が佐太郎の腰骨の上を巻いて、後ろで仮留めされる。

下向きになった角からは、もつと細い鎖が垂れている。それが尻の谷間を割って後ろへ引き上げられ、腰を巻く鎖と重ね合わされて、カチリ、小さな錠前でつながれた。

「行住坐臥、二六時中、それで包んでおくのじゃ」

「……これでは、あの、用が足せません」

どうしても曖昧な物言いになつてしまう。

「来るときに橋を渡つておろう。水に浸かつて、そのまま漏らせ」

別当が事もなげに言い放つた。小便は金網から漏れ出るし、大の方も鎖を押し通る。用を足した後は指で鎖を洗えば良い。

「三、四日の辛抱じゃ。水揚げが済めば、見習と同じ姿に直してやる」

水揚げの意味はわからなかったが、こんな不便で屈辱的な姿を何日も強いられるのかと、佐太郎は氣落ちした。

見習と同じ、袖が無く丈の短い胴着を与えられたが、それで恥辱が薄れるはずもなかった。

「水揚げまでは鍛錬を免除してやる。庄助と太吉の下知で下働きをしておれ」

奇ッ怪な得度の儀式は、すでに終わつたらしい。

「ついて来よし」

見習では最年長に見える竹が、佐太郎に声を掛けて外へ向かう。

「行け」

別当の声に背中を押されて、佐太郎も歩き始める。股間がゴワゴワして、金網の縁の針金も鼠蹊部に食い込む。鎖が肛門を圧迫する。苦痛ではないが、違和感が甚だしい。

講堂の裏手は土が剥き出しの庭になっていて、三方から取り囲むように種々の建物が並んでいる。いくつもの戸口がある瓦葺きの三棟は僧房だろうし、大きな戸口がひとつだけの小さな棟は庫裏（台所）か。がっしりした土蔵もあれば、薪小屋もある。

薪小屋の前では、初老の男が薪を割っていた。筒袖を尻端折って草履を穿いた、ごく普通の下男の姿だ。

竹も草履を突っ掛けていて、裸足なのは佐太郎だけ。履物の有無が、見習と下見習の差別なのだろうか。

「庄助どん。こいつ、新入りの露。持ち逃げ

侍の息子で、人別から外されてうちで生涯奉公させるやつ。片っ端から仕事を言いつけてやりよし」

竹が、佐太郎の負い目を並べ立てる。

二十年も昔は、さぞ筋骨逞しかったろうと思わせるズングリした身体を立てて。

「ほう。魔羅封じかい。来る早々、なにかやらかしたのか？」

庄助が、まず目に付けたのがそこだった。

「違うよ。こいつ、未通おぼこにや。でさ、御家様様が初汁を御所望なのは知ったはりまっしやろ」

「御家老と聞いて、佐太郎の胸が騒いだ。上意とはいうが、殿様は可否を決するだけで、実際に起案するのは家老あたりだ。十万石の御家で家老といえ、江戸家老と国家老の二人しかない。つまり。連座の罪に死一等を減じていっその屈辱を吞ませた張本人。その人に、水揚げとやらをされるらしい。それも精通が絡んでいるとすれば、卑猥なことな

のか差ずかしいことなのか、碌な仕儀ではなさそうだ。

悪いのは父であり我等なのだから、殿様にも御家老にも怨みは持てぬが、しかし、心中穏やかならぬものが奔った。

「んじゃまあ。薪割りを替わってもらおうかい」

庄助が、ノンビリと言った。

「へなへナの竹刀とはわけが違うぞ。腰を入れて掛かれよ」

幼い頃には鍛錬の意味もあつて薪割りをさせられたこともある。斧は力任せに振り下ろすのではなく、腰を落としながら軽く振れば良い。佐太郎は割りやすい向きを見定めて玉切材（原木を適当な長さに寸断したもの）を台に据え、足は肩幅に開き、やや手前を打つ狙いで斧を振り下ろした。

パカン。

綺麗に割れたのだが。忘れかけていた股間の違和感が甦っただけでなく、尻に鎖が食い

込んで、痛いのではなく官能を生じさせた。

二度三度と続けるうちに、股間が刺激されて勃起を催してきた——のだが、金網に締め付けられて、ますます刺激が強まる。亀頭が無理矢理に包皮を押しつけて、金網が柔肉に食い込む。そうなるとさすがに苦痛が勝つて、わずかに委縮する。すると、また官能が頭をもたげてくる。

薪小屋の外に並べられていた原木をすべて八つに割り終えたときには、全身が汗で濡れていた。太さや焚き付ける順序を考えて、何割かはさらに細かく割る必要があるが、それは庄助の指図を待たねばならない。

庄助の姿を求めてあたりを見回すと、表への回り口に侍姿が立っていた。風貌を見れば五十はとっくに過ぎているようだが、眼光鋭く立ち姿に揺るぎが無い。

「生半の侍より、腰も振りもシツカリしておるな」

官能と苦痛のせめぎ合いにあっても、身に

着けた業が自然と、佐太郎の身体を動かしていたのだろう。

「だが、閨の中ではどうか。聞くところによると、尻穴修業をさせぬとか」

またしても意味のわからない言葉を投げられた。それには答えず、佐太郎は侍に向き直って、キチンと頭を下げた。

「この寺に奉公することになった小早川……いえ、露と申します」

「榊兵太夫。この寺に雇われておる」
寺侍だった。とはいえ、『雇われている』というのだから、寺を主家に持つわけではない。寺の都合でいつでも暇を出せる。それでも八九三者に雇われる用心棒と違い、士籍は得ている——といった詳細までは、佐太郎の知るところではないのだが。

現代に置き換えて謂えば、仕官している武士が正社員であるのに対して、榊は長期契約社員といったところだろうか。その伝で謂えば、用心棒は日雇いのアルバイトでもあろう。

いや、余談が過ぎた。

榎は見物に飽いたのか、佐太郎の珍妙な身形をからかうことなく立ち去った。閨とか尻穴修業に言及したことで、それ以上の重複を避けたのだとは、佐太郎にはわからなかった。

ひと休みしているうちに、三十になるやならずの男が裏庭に現われた。庄助と同じ下男の身形で、力仕事で鍛えた身体つきだった。

「おまえが新入りの露か。わしや、太吉という」

「はい、よろしくお引き回しのほどを願います」

佐太郎は、この男にも丁寧に頭を下げた。

とにかく、佐太郎はこの寺でもっとも身分低き者なのだ。母の教えに従って、武家の嫡男だったとか三百五十石とかは、綺麗さっぱり忘れ——ようとしている。

「なるほど、美形だの。別当さんが執着したのも無理はないわい」

青年の階によく足を掛けようとしてい

る佐太郎は、まだまだ線が細い。加えて、よくいえば眉目秀麗、挿揄すれば女顔。

しかし、それが何故に別当の執着につながるのか、佐太郎にはわからない。いや、それ以前に。別当とは一時いつとき(※)ほど前に顔を合
わせたばかり。執着云々でもなかりうに。

ゴオオオオオオオオン

殷々と鐘が鳴り始めた。

「ほい、九ツだ。坊さんは勤行があるが、わ
いらは先に食べてかまわんことになつとる。

庫裏へ行って、飯をもらえ」

「そこで食べるのですか？」

「あん？ なんじゃ、仕来りを教わらんうち
からこき使われとるんか。わいらは飯をもら
つたら、それぞれの房で食べるのだ——おお、
迎えが来たな」

竹と太吉に連れられて、佐太郎も庫裏へ行
った。井に半分ほどの麦飯に味噌汁をぶつか
けて、飛龍頭と沢庵がチョコンと乗った小皿
がひとつ。それだけだった。

それを両手に持って、大きな三つの棟の左端に入る。大部屋になっていた。

弓と里が脚を投げ出して壁際に座し、すでに井飯を掻っ込んでいた。竹と佐太郎の後から、駒と鶴もやって来た。小姓と腰元は別室らしい。

佐太郎はキチンと胡坐に座り、箸を押し頂く形で合掌してから、井を手を取った。しかし、行儀が良かったのはそこまで。他の五人に負けぬ勢いでガツガツと喰らった。薪割りで疲れてはいても、食欲が失せるほどではない。なによりも、まわりに合わせねばと気を遣ったのだった。

「井と皿を返したら、つぎの鐘までは作務もおへん。何をしててもかまへんけど、お墓参りと小坊主さんの目にはつかんようにな」

「竹よ。あんさんは露を仕込むんやなかったかい」

違ってもせいぜい一つか二つの駒が、無遠慮に割ってはいる。

「そないやった。面倒いこつちや」

そういうわけで、半時ばかりかけて、精徳寺の仕来りと日課を佐太郎は教わった。

——起床は、空が白み始める寅の下刻。雪隠を含めて建物内の清掃は僧侶の修行なので、出番は無い。そのかわり、広い境内の掃除がある。雨の日でも欠かせない。

朝餉も今と同じように、僧侶よりも先に、この房で食べる。

それからは、主として風呂の掃除と水汲み。「先にするか後にするかはともかく、お風呂を所望しはる信者はんもおるから、鉄砲風呂が三つもあるにや」

鉄砲風呂とは、大きな棺桶ほどの湯船の一端に鉄の筒を仕込んで、そこに薪をくべて沸かすものをいう。風呂釜全体を底から熱する五右衛門風呂よりも使い勝手が良く、主に東国で広まっている。

「ほしてからに、坊さんたちが夜に使う大きな風呂もあるけん、大仕事やわ」

見習はもちろん小姓も腰元も、鉄砲風呂の仕舞湯しか使えない。厳寒期を除けば、大門の脇を流れる小川で済ませてしまう者も多い。今日の佐太郎のように、薪割りを言いつけられることもままある。

「ほんで、まあ今になるんやけどな。ぼつぼつ信者はんがおいでやから……おっと、言つた先のあれやで」

隣の部屋で戸口の開く音がして。竹が立ち上がって連子窓の外を指差した。

佐太郎も立って外を除くと。若冬と美雪が連れ立って法堂の裏を歩いている。素肌の小袖を引つ掛けた雑な身形で、二人とも大きな手拭いを肩にかけて、若冬は水鉄砲のお化けみたいな道具を手をしている。

「川で、尻の中を綺麗にしはるにや。今時分はええけど、冬はしんどいどすえ」

何のために、どのようにして——とは聞かない。知る必要があるなら教えてくれるだろう。それよりも。誰も彼もが信者という言葉

を口にしてはいるが、どうも、檀家の者とは違
うらしい。それを尋ねると。

「檀家の御人は、信徒いうんや。そんで、御
喜捨な。信者はんが出しはるんは御寄進や」

と説明されても不得要領もいいところだが。
それよりも、竹の京言葉（らしい）が気にな
った。

「竹殿は、畿内の生まれなのですか？」

「ああ、この喋り方どすか。これは、アリン
ス言葉みたようなもんどす」

この寺の陰間は皆、京言葉を使うように躰
けられていると、竹が説明した。陰間という
言葉を聞くのも今日が初めて。これもなんの
ことかわからなかった。どうやら、佐太郎を
含めて有髪の少年を指しているらしい。

「ふだんはそないでもおへんが、信者はんの
前では、地言葉は御法度どす。額朴はんもや
けど、別当はんの折檻は厳しいえ」

「愉しんでやがんだよ」

本を読んでいた駒が、吐き捨てるように言

った。

そつちを振り返って、佐太郎はちよつと驚いた。絵草子ではなく、漢文がビッシリ書かれていた。

「これ、論語どす。信者はんにはお侍が多いさかい、寝物語も魔羅と同じくらい硬いんや」

上昇志向が強い娼妓ほど、自らすすんで詩歌や書の素養を身に着ける。それと同じことなのだが、もちろん佐太郎の理解の外だった。

「あんさんはお侍でもええとこの出やさかい、六韜三略くらい諳んじとるやろけどな」

駒の言葉には毒が含まれているように感じられた。

「この話はやめよし。露は未通おぼこで初心うぶなまま突き出すんやさかい」

「泣かんけりやよろしおすな」

もう相手にはせず、竹は佐太郎に顔を戻した。

「先付けは滅多におへんが、うちらも振りの信者はんのお相手をすることが、何日かに一

度はあるえ。そんなときは、若竹はんらみたい
にノンビリは出来へんえ」

僧侶は就寝まで読経だの座禅だの修行が続
くが、見習は見習いで尻穴修業やら尺八修業
が待っている、またしても佐太郎には理解
できない言葉で教授が締めくくられた。

それを待っていたかのように、額朴が房に
来て佐太郎を連れ出した。

「汝は、まだ陰間とはどういうものであるか
わかっておらぬだろう。百聞は一見に如かず
という」

これから、若冬の勤めぶりを見せてやると
いう。

連れ込まれた法堂には、別当ひとり待ち
構えていた。

「物音を立てられたり声を出されては、信者
の興を削ぐゆえの手立てじゃ」

佐太郎を小部屋に引き入れて。金網の前袋
だけに剥いて（といっても、心許ない胴着一
枚を脱がせるだけだが）、後ろ手に縛った。役

人が使った捕縄よりも太い縄を二重にして、役人よりはるかに厳しい縄を掛けた。

手首を肩の高さ近くまでねじ上げて縛る。

両側に余した縄尻を二の腕に巻き留めて、肩から先がピクリとも動かなくなるまで引き締めた。胡坐に座らせて足首を引き上げ、膝のくぼみの上に足の甲を乗せる。座禅の座り方、いわゆる結跏趺坐だ。

「口を開けよ」

丸められた布を見て、声を封じられるのだと悟ったが、佐太郎は素直に従った。口いっぱいには布を頬張らされて、さらにその上から、大きな結び玉を作った縄で頬を巻かれた。

「大声で叫んでみよ」

「あばあああ」

森閑とした法堂に、呻き声は思いのほか大きく響いた。

「ふむ。事が始まってからそのような声を発せば、これで鼻もふさぐゆえな」

別当は、大きな洗濯バサミを佐太郎の目の

前にかざした。

脅しだとはわかっている。口に詰め物をさ
れたうえに鼻をふさがれては、窒息してしま
う。御家老に突き出しだか水揚げだかをされ
る前に、佐太郎を殺すはずがない。もちろん、
それを試そうなどとは考えない佐太郎だが。

声を封じられて、それで終わりではなかつ
た。交差した足首の先に顎が突き出るまで、
佐太郎は二人掛かりで上体を前へ押し曲げら
れた。

「ん、んん……」

どうしても苦悶が漏れてしまう。ミシミシ
と背骨が鳴っている音が耳に聞こえるような
気がした。

佐太郎がその苦悶から解放されることはな
かった。腿と肩をまとめて縛られて、まさに
身じろぎひとつできない形で固定されたのだ。

そのまま持ち上げられて壁際へ運ばれ、壁
に向かって身体を立てて床に置かれた。尻の
頂点が床に着いているだけだから、手を放せ

ば倒れてしまう。肩に縄が足されて、半ば天井から吊り下げられる形になった。

身体を前へ倒されて、額が壁に着いた。

「では、拙僧はこれにて」

額朴の声とともに板襖が引き閉められて、小部屋は薄闇に閉ざされた。

「んん……？」

向こうの部屋が透けて見えた。覗き穴ではない。削いだ竹の皮を組んだ小さな格子窓になっている。窓の雨戸を開けている向こうからは竹の皮に光が照り反って、目を近づけても聞しか見えないだろう。新参者に目学びをさせるためではない。他人の情事を盗み見る癖のある、そして余分の寄進をできる信者のために設けられている——とも、佐太郎の知るところではなかった。

待つほどもなく。丸に菱井筒の五つ紋の羽織を着た武士が、額朴に案内されて部屋に通った。後ろには脇差を腰に落とした小姓姿の若冬が付き従っている。

額朴が無言で会釈して、襖を閉めた。

若冬は下座に跪き、武士から大刀を押し頂いて刀掛けに置く。武士が床の間を背に座るのを待って、みずからも正対して座った。

「後藤田様、お久しぶりです」

深々と額づいて、そのまま待つ。そこまでは、四角四面の行儀作法だったが。

「なにを他人行儀な。我とそなたの仲ではな
いか」

「そやかて、三月もお見限りどした。繁信な
んてお名前、忘れてしもたんえ」

「なんじゃ、拗ねておるんか。いつまでも子
供じゃのう」

「むくつけき男は嫌いとおっしゃったんは、
繁信はんえ」

「だから、俺は若冬が好きなのじゃ」

後藤田が腰を浮かして若冬を引き寄せ、顔を寄せて口を吸った。

ズヂユウウ……唾にまみれた音が、佐太郎の耳まで届く。

「んんっ……？」

乳首に痛みを感じても、わずかに身を震わせるしかできない。背後から別当に抱きすくめられて、二つの乳首をつねられていた。ほんとうに声をたてずにいられるか試されている——というふうには、佐太郎には考えられない。

「こういうのが好きな信者もおるぞ」

別当が佐太郎の耳元にささやいた。

「……………」

乳首の痛みも別当の声も、佐太郎から遠ざかる。目を疑う光景が眼前に繰り広げられつつあった。

若冬が後藤田にしがみついて、もっと肌を寄せ合いたいとばかりに、膝にまたがった。

「あああん。繁信はんたら、こないに硬うしはって……」

腰を後藤田の下腹部に押しつけて、尻を左右にくねらす若冬。

その尻の下に、どのようなようになった何がある

かは、無知な佐太郎にも自明だった。

後藤田が攻守所を変えて、若冬を畳に押し倒した。

若冬は逆らわない。腰に帯びた脇差を左手で抜き取って、遠くへ滑らせた。

邪魔物の無くなった身体に後藤田がおおいかぶさる。若冬の襟をはだけて、肌を唇を這わす。

「ひゃあん……こそばゆい」

甲高い声は、くすぐったがっているようには聞こえない。

後藤田は胸元をはだけるだけでなく、帯をほどこ袴を脱がせ——とうとう禪一本にまで剥いてしまった。その間も、あらたに露出した肌への口づけは忘れない。

嬌声をあげて悶えているようだが、実は醒めていて芝居をしているのではないかと、佐太郎は思い至った。若冬は脱がされた振袖を身体の下に敷いて、唾液にまみれた肌を畳に触れさせないようにしていたのだ。

後藤田が身を起こした。せわしない手つきで、みずからも禪姿になった。越中禪の前袋が緩んで、さして元気でもない陽根がデロンと垂れている。それを、若冬の禪にこすり付ける。女と媾合うように（とは、佐太郎にはわからないのだが）腰を振って擦ると、ゆつくりと怒張していく。

若冬が腰に手をまわして六尺禪をほどいた。こちらは、まだ半勃ち。が、兜と兜を突き合わせて後藤田の動きに応じ始めると、たちまちに怒張する。

「そろそろ、掛かるぞ。まずは湿してくれ」
仁王立ちになる後藤田。

若冬はそのまえにひざまずいて。

「んんっ……っ？」

声を封じられていなければ、佐太郎は驚愕のあまり叫んでいただろう。

後藤田が床の間を背にしているので、隣の部屋に潜む佐太郎は、二人を真横から見ることになる。若冬が後藤田の怒張を口に啞える

ところが、鮮明に見えた。それどころか。口をすぼめて魔羅を啜り上げる様も、上体を揺すって魔羅を浅く深く啞え込む様も、左手で玉袋を揉みしだく様も、何もかもが見て取れた。

（我も、あのような真似を強いられるのだらうか？）

驚愕に続いて、疑問の形をとった嫌悪が胸に込み上げてきた。魔羅を口に突き立てるか、短刀を腹に突き立てるか、どちらかを選べと迫られれば、迷わず後者を選んで――は、いけないのだと、佐太郎は思い直した。

「もし一人たりとて命に服さず逃亡を試みれば、一家そろって市中引き回しのうえ磔に掛けるから、左様心得おけ」

自死もまた、逃亡のひとつではなからうか。

いや、それよりも。あのような醜行を強いられるのも、罰のひとつといえよう。罪に問われた身で罰を逃れようなど、心得違いというものであらう。

そのようにして、佐太郎は観念を重ねていくのだった。

「もうよい。暴発しかねぬ」

後藤田が若冬を突きつけた。

突き飛ばされて畳に手を突いて。そのまま、若冬は四つん這いになった。

後藤田が膝立ちになって、右手で魔羅をにぎって若冬に背後からおおいかぶさった。

(あ……)

佐太郎は、犬の交尾を思い出していた。いくら無知でも、それくらいは見て知っている。

しかし、男と男で、どうやって……謎だったこれまでの言葉が、相互に噛み合った。

閨、尻穴修業、尻の中を綺麗にする……。

果たして。後藤田は、剛直を若冬の尻に突き立てようとしている。

「ああっ……入ってきはる。はあああ……熱い……熱いけど、気持ち良うおす」

声が鼻に抜けている。しかし、あのように入物を不浄の穴に突き込まれて、気持ち良

いはずもない。これも芝居だろうか。

「ああつ……あかん。そないに乱暴に突かん
といて。ゆつくり……もつと、気もち良うさ
せとくれやす」

後藤田は、これはほんとうに快樂を貪つて
いるらしい。若冬の訴えなど聞く耳持たず、
ガシガシガシガシと、荒々しく腰を打ちつけ
ている。

後藤田が若冬の股間に横合いから手を差し
入れた。

「ガチガチになっておるな。もつと気持ち良
くさせてやろう」

後藤田の右腕が小刻みに動くのが、佐太郎
にも見えた。

「やめよし……うち、この後も御勤めがある
さかい」

「一時やそこらの猶予はあろう。若いのじゃ
から、二段撃ち三段撃ちもやさしかろう」

後藤田の腕の動きが、ますます早くなる。

「出すぞ……若冬も逝け」

後藤田が、米撞蝗コメツキバツタよりも激しく腰を振る。

「ああっ……後藤田はん、恨みますえ」

若冬の身体が強張って、敷いた小袖に白い汗が飛び散るのが見えた。

数瞬遅れて。後藤田も硬直して、ブルルツと尻を震わせた。

「ふうう……」

後藤田が若冬を放して、尻餅を搗くみたい
に座り込んだ。

若冬が、こちらはシャンと身体を起こして、
部屋の隅から落とし紙を引き寄せて、それで
後藤田の股間を拭う。

「んんん……」

乳首に痛みが甦って、佐太郎が呻く。後藤
田と若冬の行為に気を取られて痛みを忘れて
いたのか、ひと段落ついて、別当があらため
て佐太郎を騷り始めたのか。それがわからな
い程に、やはり佐太郎は気を奪われていたの
だった。

後藤田の股間を拭った落とし紙を使って、

若冬もおのれの股間を拭った。

その様子を、後藤田が凝つと見詰めている。

佐太郎にも、若冬の行為の意味がおぼろにわかる。他人の身体を拭いた手拭いで我が身を拭くのと同じだ。そんなことをするのは、幼子を風呂に入れた親くらいのもものではなからうか。

「後藤田はんのせいでおべべが汚れてしもた。洗い張りに出さなならへん」

若冬が振袖を広げて、小さく呟いた。そのまま、凝つとしている。

「これで勘弁してくれい」

後藤田が財布から金色の小さな板を取り出した。それが一分金なのか二分金なのかまでは、金銭に疎い侍の子には見分けられない。しかし、洗い張りの手間賃にしては過分であるとはわかる。

「おおきに。繁信はんは気前がええきに、うち、大好きや」

お世辞の中におねだりまで仄めかされて、

さすがに後藤田が苦笑した。

若冬は禪だけを身に着けると、後藤田の着付けにかかった。

禪と襦袢は我が手で身に着けて、そこから先を手伝うのが、佐太郎が見知っている唯一の——父母の作法だったが。なんと若冬は、背後から抱き着くようにして、越中禪まで面倒を見たのだった。それが親愛の情に発した行為ではないと、これまでの仕儀を見てきたからには、佐太郎にも推察できた。

身支度を調えた二人は、小部屋から出て行った。詳しく描写するなら。そそくさと引き上げる後藤田の腕に取り纏るようにして、若冬がついて行ったのだった。

「一時でも小半時でも同じ一両だというに。精を放てば、途端に男は醒めるものじゃ。されど、陰間はそれではいかん」

なにやら説教めいたことを口にしながら、別当が佐太郎の縄をほどきにかかった。

「邪険にされても、若冬のように信者に甘え

るのじゃ。後々に思い出して、またあいつを抱いてやろうかと、鼻を伸ばすからの」

我から男を誘えと言われていたのだと気づいて、佐太郎の恥辱はさらに深くなった。

それにしても一両とは。若冬はもう一回(か、それ以上の)醜業を重ねるらしい。腰元も同じように信者を接待するのだとすると——四人で一日に八両。一年では途方もない額になる。

神聖な寺院で、宗徒の範たるべき僧侶が悪銭を稼いでいるとは、なんたること。佐太郎は義憤に駆られたが、囚われの身ではどうすることも叶わない。それでも。

「このような、遊郭紛いの悪行が世間に知れたら、寺の名誉、いえ存続にすらかかわってくるのでは……ぐうっ！」

佐太郎は自由になつたばかりの身を、また二つに折り曲げ、腹を抱えてうずくまった。

鳩尾に拳を突き入れられたのだ。不意打ちゆえ、腹に力を入れる暇もなかった。

「知る者はとつくに知っておる。なよなよとした女子を嫌おなごつて衆道を好む侍も多い。御家老様も御用達じゃわい」

佐太郎は呆氣にとられた。家老を相手に先程のような醜行をせねばならぬとは、すでに覚悟はしていたが。少年遊廓を公認だか黙認だかしている、あらためて気づいて、胸に苦いものが込み上げてきた。

しかし。佐太郎は、おのれに非を鳴らす資格がないことを思い出した。小早川家の檀那寺がここでなかったことを、せめてもの慰めとするばかりだった。

「二度と馬鹿なことを口走るでないぞ。つぎは、警策のひとつやふたつで済むとは思わなよ」

警策とは、座禅中に想念や姿勢の乱れを戒めるために肩を打つ棒のことである。急所への手加減無しの拳骨をそう呼ぶとは、ずいぶんとふざけた禅僧ではあった。

佐太郎は、無言でうなだれている。それが、

精一杯の恭順の表明だった。

「いね。大部屋で、おとなしくしておれ」

佐太郎を放置して、別当はさっさと部屋から出て行った。

佐太郎は胴着を羽織って法堂から出た。半時ほども苦しい姿勢で縛られていたので、どうにも動きがギクシャクしてしまう。手も足も、まだ痺れが引いていない。

女髪に結って無地の小袖を着た美晴が、水鉄砲のお化けを両手で胸に抱いて、中門からこちらへ歩いてくるのが見えた。

佐太郎は目をそらして、裏庭に駆け込んだ。

裏庭では、駒と竹が禪一本になって角力を取っていた。本気ではなくじゃれ合いのようだった。弓、鶴、里の三人は、法堂のすぐ近くにある建物の外で、壁から突き出た小さな煙突の下にしゃがんで替わりばんこに火吹き竹を吹いている。美晴が迎える信者の為だろうと、今の佐太郎には見当がつく。

見習が起居する大部屋の中には、誰もいな

い。形ばかりの床の間には、数十冊の書物が積まれている。小早川家も含めて、武家でもこれだけの蔵書を揃えている家は珍しい。駒が読んでいた論語が、いちばん上に重ねてあった。

一冊ずつ手に取って、佐太郎は驚きと惑々を感じた。必須の兵法書である六韜三略があるかと思えば、男女の媾合いを詳しく描いた絵草子もある。和歌の手解き、俳句集、詰め将棋、頓智問答集。もちろん記紀もそろっていた。先ほどは小半時余りで終わったが、その前後に、こういった書物から得た知識で四方山話に時を潰すのだろう。読んでみたい本は幾つかあったが、そう思い至ると手に取ってみるのも汚らわしく感じられた。

戸口に人影が立った。湯帷子一枚をしどけなく（どうしても、女の形なりを表わす言葉が頭に浮かぶ）羽織った若冬だった。

「見とったんやろ」

からかいの嗤いを含んだ声だった。

「おまんも縛られた口か。猿轡の痕もついでるえ」

手首を見ると、クツキリと赤い筋が刻まれていた。

「別当はんが、いちばんきついさかいな。ていうか、うちらを甚振るのが生き甲斐みたいな御人なんや」

好んで弱い者虐めをする輩は、どこにでもいる。そんなふう聞いた佐太郎だった。性的嗜好としての加虐など、想像もできなかった。

——佐太郎が気づいた限りにおいても、その日は若冬と美晴が二回、若雲と美雪も一回ずつ、さらには竹までが信者の相手をさせられた。

最後の信徒が大門を出たのは申の下刻（午後五時頃）。そこで、人の出入りは途絶えた。来る者は拒まずと、寺の門が閉ざされることはないが、日が暮れてから山道を登って来る馬鹿もいない。

竹の話では、三両の寄進をして宿房に泊まる（陰間にとつては）迷惑な信者もいるのだそうだが、それは別の話として。

この時代は、人々の暮らしは日の出に始まり日の入りで終わる。街中にある遊郭なら話は違うが、山寺では暮れ六ツ（午後六時頃）が大引けというわけだ。

時をすこし戻して。

八ツ半（午後三時頃）を過ぎると、佐太郎は相当に切羽詰まってきた。山道を一町（約百米ートル※）も下ると小さな川がある。そこで用を足せと言いつけられてはいるが。金網の禪は、つまりは下着である。下着のまま放尿するとは、まるで「おもらし」ではないか。我慢を続けてきたのだが、もう限界だった。

大部屋を見回すと、壁の一面に竿が渡してあり、大小の手拭いが掛けられている。しかし、布の隅にそれぞれの名前が書かれてあった。ゆみ、たけ、つる、さと、こま——つゆと書かれた手拭いはない。

歩くうちには乾くだろうと、佐太郎は手ぶらで外へ出た。奇妙な禪と、つんつるてんの袖無し胴着。素裸よりも羞ずかしい。境内を突っ切る度胸は無く、壁に沿って遠回りをして中門をくぐった。その後も道の端を歩いたのだが、まだ履物を与えられず素足のままなので、木の枝などを踏まぬよう用心して歩いたから、川辺まで来たときは、一刻の猶予もならぬまでになっていた。

佐太郎は胴着を脱いで、小川に足を踏み入れた。深さは、せいぜい膝が没するくらい。ちよつと思案してから、水の中にしゃがみ込んだ。

わずかに気を緩めただけで、小便が堰を切った。股間に生暖かな感覚がわだかまって、それがせせらぎに流されていく。

「ほおう……」

佐太郎は、恥辱の中にも安堵を覚えて、深い溜め息を漏らした。

小便はよいが、大便もこのようにしなければ

ばならない。器用に大便だけできるものなら、陰間に割り当てられている雪隠を使つても叱られないかもしれないが、小便を飛び散らかすのはわかりきっている。

さいわいに、寺に帰り着くまで誰にも行き会わなかった。つまりは、それだけ参詣客が少ない。だからこそ、堂々といかがわしい娼売をしているのだろう。そんなふうに穿つ佐太郎だった。

——日が暮れても、僧侶の勤行は続く。そして、見習陰間の修業が始まる。

駒が鶴と弓を連れて、水鉄砲のお化けを持つて出て行き、戻つて来ると、竹が里を伴つて出て行く。小川で尻の中を洗つて来るのだ。水鉄砲のお化けをどのように使うのか、すでに佐太郎も感づいている。

佐太郎には誰も声を掛けず、水鉄砲は免れたのだが。

見習の支度が調つた頃合を見計らつて、別当と額朴だけではなく、残る二人の修行僧も

大部屋に姿を見せた。

五人に倣って列の端に正座していた佐太郎に別当が声を掛けた。

「汝は目学びじや。ウロチヨロされては目障りゆえ」

佐太郎は胴着を脱がされ、手足に一本ずつ縄を巻かれて、床にうつ伏せにされた。僧房も大部屋も質素な造りなので、天井は無く梁が剥き出しになっている。四本の縄が背中であとめられて、その梁から一間（約一・八メートル）の高さに吊るされた。

「ぐううう……」

昼に折り曲げられたと真逆の向きに身体がへし折られて、背骨がミシミシ軋んだ。今にも肩が抜けるのではないか、腰骨が外れるのではないかと思うほどに苦しく痛かった。

「さすがは武士の子じやな。駿河間に吊るされて悲鳴をあげなんだのは、汝が初めてじゃ」

別当が佐太郎を見上げて、冷酷に微笑んだ。

「まだまだ愉しませてくれそうじやな」

手を伸ばして肩をつかみ、佐太郎の身体をぶん回した。

「くっ……ぐううう」

頭に血が上って、目の前が薄赤くなった。

視界がゆっくりと回る中で、五人の見習が素裸になった。

三人の修行僧も素裸になって、板の間に筵を敷いて胡坐に座った。

年少の三人が名前を呼ばれて、それぞれの前に正座して。平伏する形で、修行僧の股間に顔を埋めた。

右から左へ流れていた景色が止まって、今度は逆向きに回り始める。頭がガンガン鳴っている。

三人の見習は、両手で玉袋を支え撫で擦りながら、半勃ちの男根を口に咥えた。

ズズジュジュ……

ピチャベチヨ……

ズブズブズブ……

それぞれに男根を吸い、舐め、吸る。

穢らわしい——と思いつつも。佐太郎は眼下に展開される光景に目を奪われてしまう。

「付け根を手で握るな。喉の奥まで咥え込まんか」

「もつと舌を動かせ」

「そのように一本調子では、くすぐりたいだけじゃわい」

修行僧が、アレコレ注文を付けている。おのれがもつとも気持ち良いようにさせれば、それがそのまま淫技の指導というわけだ。

修行僧の男根が太く長く硬くなっていくのが、まるで手妻のようにも思える。数日のうちには、我もこのような仕儀を強いられるのかと思うと、吊られて回されているせいもあって、強い目眩に襲われる。

(なんと……!?)

三組からすこし離れた部屋の隅では、駒が中腰になって上体を浅く倒し、膝の屈伸を繰り返している。浅く広げた足の中央に、木の棒が突っ立っている。木の棒の先端は、尻を

貫いていた。つまり駒は、みずからの動きでおのれの尻穴を苛めて——いや、鍛えているのだろう。

その横では。竹が肘を突いて四つん這いになっている。斜め上からでは覗き込めないが、両手を胸の下で交差させて、乳首を弄んでいるらしい。その横に別当がおおいかぶさって、右手に握った棒を竹の尻に抽挿している。

棒というよりは、一直線の巨大な数珠だった。珠は手元にいくほど大きくなっている。出入りしているあたりで、一寸から一寸半ほどだろうか。

別当は単純に数珠棒を抜き挿ししているのではなく、小刻みに何度も浅く突いたり、深くまでゆっくり突き込んだり。あるいは抽挿しながら円を描くようにこねくったりしている。

「あっあっあっ……はあああああ。い、痛い……どうすう」

苦しいのを耐えているのではなく、わずか

な苦痛を誇張して訴えているように聞こえたのは、しばらくの間だけだった。

何度か景色の流れが逆転し、次第に動きが遅くなり、ついには静止した頃には。

「あああつ……もつと……もつと掻き回しておくれやす。ええ、凄う……気色よろしおす……魔羅が切のうおます」

言葉に嘘偽りはなさそうだと、佐太郎は判じた。信者と呼ばれている淫買客を相手には媚びて芝居をするのもわかるが、今はその必要もないはずだ。

「ああんん……もつと深うまで突き殺しておくれやす。お、お願いどす」

佐太郎が小便を我慢していたときとは比べものにならないくらいに、切迫した様子だった。

「よかろう。されど、漏らすでないぞ。尻穴だけで啼いてみせよ」

数珠棒を操る別当の手の動きが大きく、そして速くなった。

「ああああっ……逝きますえ……極楽浄土が目の前に……」

いささか芝居がかった物言いだったが、それに続く絶叫は、佐太郎の耳には本物に聞こえた。

「うああっ……落ちるおちるうーっ!!」

竹の背中が反り返って、そのまま宙に磔けられたかに見えた。

別当が数珠棒を引き抜くと。使い手を失った木偶人形のように、ユラアツと横倒しになった。身体が床に打ち当たる音は、佐太郎には聞こえなかった。強張っているように見えて、竹の身体はフニャフニャになっていたのだろう。

精を放たずに法悦境に達するという、男にはあり得べからざる（しかし、ここでは珍しくもない）出来事を目の当たりにした——と佐太郎が悟ったのは、三月も後に自身もそれを覚えてからのことではあったが。

年少の三人は、修行僧が精を放たぬままに

口淫奉仕の練習を終えて。新たな鍛錬が始められていた。

先細りになっている長さ八寸ほどの棒が尻穴に突き立てられている。太さは一寸弱。夜毎に仕込まれているのだろう、痛みを訴えることもなく、三人ともツルリと呑み込んだ。棒の端には穴が開いていて、そこに縄が通されて、あたかも禪のごとく腰に巻きつけられた。

「こうして日頃から広げておくと、鶏姦が容易になる」

額朴が佐太郎を見上げて説明した。

「可哀想じゃが、汝はまったくの未通で差し出す約定になっておるがな」

つまり、慣らされることなく、いきなり魔羅を尻穴に突っ込まれるのだ。それがどれほど痛いものか、佐太郎には想像もつかない。

腹を切ることに比べれば、物の数ではない——そんなふうには思おうとはするのだが。一度きりの名誉の死と、毎日のごとく繰り返し返さ

れる恥辱の苦痛とでは、まるきり話が違ふ。

別当が駒の鍛錬に取り掛かるのを合図に、佐太郎は駿河問から解放された。

駒も竹と同じように、しかしこちらは絶叫とともに筵の上に白濁をぶちまけて果てた。

それで、今夜の修業だか調教だかは終わりを告げた。尻穴の棒は翌朝までそのまま留め置かれるのだが、三人とも慣れっこになっていて、ケロリとしていた。ただし、座るときは正座か横座りで、尻を床に押しつける形は避けている。

もつとも。夜明け前に起きて、それなりに力仕事もさせられて疲れてもいるから、夜更かしをする者もない。四ツ（午後十時頃）の鐘が鳴ったときには、佐太郎も含めてグツスリ眠りこけていた。佐太郎だけは、勝手に股間が膨らもうとして、金網に締め付けられる痛みで、深夜に何度か目を覚ましはしたのだが。

※六尺褌と越中褌

庶民は主に六尺褌や、もっこ褌でしたが、武士は常在戦場の心構えで越中褌を常用していました。合戦のときは長い越中褌を着用して、前垂れを二つに裂いて首に巻きます。ほどこいて布を緩めれば、褌をはずすことなく排泄可能です。袴も二つ身頃になっていて、股の部分を縫い合わせることなく、深く重ねてあります。大きく股を開くと隙間ができるのです。(以上、名和弓雄『続・間違いだらけの時代劇』より)

戦闘中にタンマしておしっこタイムなんて取れませんものね。

※時（トキ）と刻（コク）

本シリーズ内でも表記にふらつきがありますが、原則として『時』を主に使うことにします。

『刻』には、日の出から日没までを六等

分した日常的な時間単位他に、一日を百等分した単位もあるからです。こちらでは、一刻は約二時間（夏冬と昼夜で異なる）ではなく、正確に十四分二十四秒です。当時の暦学者（イコール天文学者）が使っていました、人口に膾炙もしていました。

『一刻を争う』という表現がそれです。いくら昔はノンビリしていたとはいえ、三十分や一時間くらいはどうでもいい筈がありません。まあ、現代では一分の遅刻でも罰金もの（@ブラック企業）ですけどね。

※単位換算

一町は、正確には一〇九・〇九メートルです。しかし、百九メートルなどと表記するのは、"Flight Level 320"という交信を「高度九千七百五十三・六メートル」と訳すのと五十歩百歩です。現在のハイ

テクはともかく、気圧高度計では290,300,310の刻みでしか読みません。気圧補正の誤差もあるので、321など意味を成さないのです。有効数字を考えれば、フライトレベル三二〇は、高度九千八百(ぎりぎり妥協して九千七百五十メートルです)。

したがって、一町、二町と数えるときは、百メートル、二百メートルです。一町半と表記するときは、約百六十メートルです。